



山梨県萱沼家文書による福源寺の復原研究

k98016 小川友美

1-1 研究の目的

山梨県富士吉田市下吉田の萱沼家は、近世を通じて代々「弥左衛門」の名を世襲してきた宮大工棟梁の家系であり、数多くの宮大工文書及び図面を所蔵していることでも知られている。近世甲州の郡内地方（現在の山梨県南・北都留郡）においては、甲州の他地方大工や他国大工組織の流入が殆ど見られず、独自の大工組織を形成し、極めて閉鎖的な造営活動が行われてきたことが先行研究により指摘されている。しかし、近世郡内大工の造営活動に関する史料は少なく、萱沼家文書は近世郡内大工の造営活動を知る上で、貴重な史料といえる。

そこで本研究は、萱沼家大工により造営された現存する数少ない遺構から福源寺本堂に注目し、残された古文書及び図面と実測調査に基づき、その古文書当時の建築像を復原することにより、現在の姿と比較し変容の過程を明らかにすることを研究の目的とする。

1-2 研究の方法

- 山梨県富士吉田市下吉田にある福源寺の実測調査を行なう。
- 実測調査により図面を作成し、現存遺構の構造・意匠を把握する。
- 萱沼家文書を解読し、現存遺構との比較により、当該文書当時の構造・意匠形式を分析する。
- 上記の分析に基づき、3次元CADを利用して復原し、その変容の過程を明らかにする。

2-1 郡内大工棟梁・萱沼弥左衛門家

萱沼家文書において、最古のものは宝永2（1705）年「郷中根舞之覚」（忍野浅間神社普請関連文書）であるが、それ以前の弥左衛門家の大工活動については明らかになっていない。

しかし、萱沼家文書、宝永4（1707）年「西方寺ふしん覚帳」には、「下吉田萱沼弥左衛門 西方寺三右衛門外1人」と記載されており、同家文書史料に1705年以前の郡内下吉田村において、大工棟梁として活動していたことが認められている萱沼弥惣右衛門と同時期に現れていること、その後文書史料に弥惣右衛門の名が現れないことなどから、大工棟梁・萱沼弥左衛門が、大工棟梁・萱沼弥惣右衛門の流れを汲んだ大工棟梁であったか、両者は同一人物であった可能性が高いと考え

指導教員名 伊藤洋子教授

られる。また、その一派が現存する最古史料の1705年以前に、郡内下吉田村において大工活動を行っていたと指摘できる。

2-2 福源寺の由来

福源寺はその開基など寺の創立に関する一切について明らかになっていない。ただ、もともと古森の地にあった聖徳寺が安貞年間（1227-9）に浄土真宗に改宗し、宝徳年間（1449-52）に聖徳寺を福源寺と改称し、享保10（1725）年9月に現在の地に移転したということが伝えられている。先述した萱沼家文書より元文5（1740）年に本堂建立の普請があったことはほぼ確実と思われるから、移転して15年後に本堂を新築したことになる。

3-1 福源寺本堂の構造・形状

山梨県富士吉田市の福源寺で、本堂平面図（図1）・断面図（図2）、山門初層平面図を実測採図した。表1に調査表を示す。福源寺本堂は、正面9間・側面6間の寄棟造りで、向拝1間の構えとなっている。外陣とその奥に左右余間を配した内陣からなり、内陣側の床が外陣より一段高く上段構えで、浄土真宗寺院本堂の典型的な平面を有している。内陣側は彫刻・彩色等により荘厳化され、内外陣境の欄間彫刻は特に秀逸である。屋根は茅葺であったのを、昭和9年に銅板葺に替えた、屋根の形姿は変わっている。昭和41年には内陣奥の背面側が板床の修理等によって大きく改造された。しかし、内陣・外陣は当初の様子を良く残している。内部の柱は太く、4本の外陣中柱は特に太くなっており、内部梁構に迫力を感じ本格的な意匠を持つ建物である。



写真1-福源寺外観

表1-調査表

1	建築名	福源寺本堂	腰有
2	所在地	山梨県富士吉田市	地無
3	宗派	浄土真宗	木鼻 拳鼻
4	創立・沿革	不明	組物
5	付属建物	太子堂	種類 二手先・出組・平三斗
6	建立・修理	元文5年	
7	棟札等資料	棟札無し	尾垂木 無
8	大工	萱沼家大工	通肘木 有
9	基本構造		木鼻 有
	桁行×梁間	9間×6間	実肘木 有
	屋根形式	寄棟	支輪 板支輪
	屋根材料	銅板葺(現状) 茅葺(当初)	中備
	向拝	1間	外廻り 板葺股・葦束
	破風	無	内廻り 本葺股・葦束
10	基壇・基礎		軒 二軒繁垂木
	葛石	無	15 妻飾 無
	礎石	切石	16 縁・高欄 縁 切目縁
	向拝礎石	切石	高欄 擬宝珠高欄
	亀腹	無	17 向拝 柱 角柱
11	軸部		組物 連三斗
	柱形状	円柱・角柱	中備 象・獅子
	長押		垂木(軒) 身舎の飛檐垂木が持越垂木となり向拝桁上で向拝地垂木
	蟻	無	繁虹梁 海老虹梁
	内法有		手挟 牡丹
	腰無		
	切目無		
	地有		
	貫		18 床 板張り・畳敷き
	頭有		内陣 板張り・畳敷き
	飛無		外陣 畳敷き
	内法有		19 天井 格天井・鏡天井

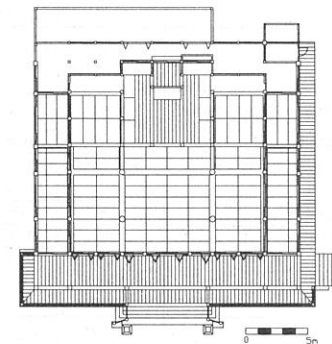


図1-本堂平面図

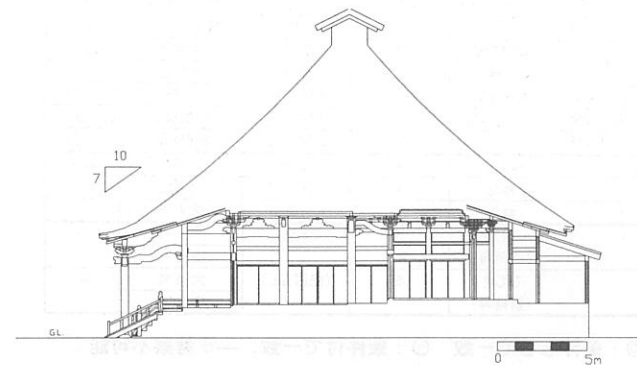


図2-本堂断面図

3-2 萱沼家文書中の福源寺関連史料

関連史料の内容は、宮大工図面8面（表2）と普請史料「御堂建立注文之覚」（表3）である。実測調査では宮大工図面中の本堂絵様下図との比較・照合を行ない、現存遺構と一致することが確認できた。

表2-福源寺関連史料（宮大工図面）

福源寺前ごはいちばり 文政8(1825)年	福源寺あび形(部分) 年未詳
1	5
福源寺六口かんわらびで覚 文政10(1827)年	福源寺こはい大内ばり形 年未詳
2	6
下吉田村福源寺御堂地割 年未詳	福源寺内梁 年未詳
3	7
福源寺あび形 年未詳	太子堂から戸覚 年未詳
4	8

4 実測調査により判明した萱沼家文書からの対応関係

I 地割及び本堂絵様下図との照合

・「下吉田村福源寺御堂地割」について

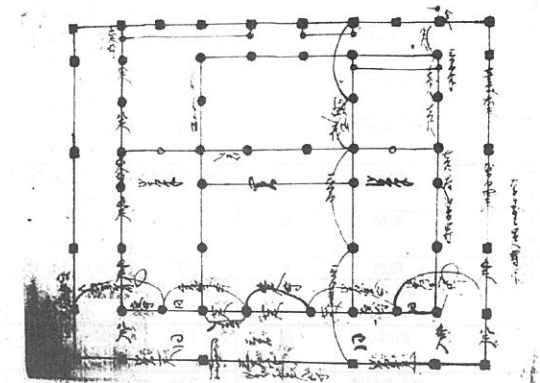


写真2-下吉田村福源寺御堂地割

遺構と指図を対応させると、柱位置と柱形状がほぼ同じであった。しかし、指図上の寸法にばらつきがあるため、遺構との関係が明らかでない。

指図に示されている寸法文字は2種類に分ける事ができる。

棟梁萱沼家は、まず新築する前の福源寺御堂間取りかそれに近いものを描き、桁行を外陣正面、梁間を左線上に記し、施主の意向を聞いて書き直しているのが括弧でくくった寸法であろう。そして、その寸法を実際の普請に用いたのである。

よって、「まず始めに理想を描き、施主の意向を聞き調整している途中の2段階を踏む指図」と推測できる。調整理由は、おそらく浄土真宗寺院の主要な平面形式である後門形式及び出仏壇・矢来内の空間採用のためである。これは、円柱と角柱を分別し矢来内の空間が重要視されていることから推測できる。従って「下吉田村福源寺御堂地割」は福源寺の設計案としての指図であり、実際の本堂は異なる姿で建立されたと考えられる。すなわち、中央須弥壇・左右余間の壇は現状の位置で当初から建設されたと考えられ、また「地割」には明確でない向拝も改造痕跡により当初からのものと考えられるからである。

それでは現本堂の実際の改造はどのようなものであろうか。

II 普請史料「御堂建立注文之覚」との照合

福源寺関連史料中の、「御堂建立注文之覚／元文5(1740)年」を分析し、現存遺構と比較する。

表3-御堂建立注文之覚

no.	部材名	数量(丁)	長	部材断面	考察結果	no.	部材名	数量(丁)	長	部材断面	考察結果	
1	柱	28(本)	3間	1尺2寸 丸	○	25	ぬき	34	1丈4尺5寸 (2間)	大:(読み取れず) 小:5寸5分	△×	
2	柱	27(本)	2間	1尺2寸 角	○	26	ぬき	9 (手直しあり)	3間1尺	大:8寸5分 小:5寸5分		
3	大けた	3	4間2尺	大:1尺8寸 小:1尺2寸	○	27	ぬき	11	3間	大:8寸5分 小:5寸5分		
4	大けた	4	3間2尺	大:1尺4寸 小:1尺2寸	○	28	ぬき	11	2間〇〇 (読み取れず)	大:8寸5分 小:5寸5分		
5	大けた	2	4間	1尺2寸	○	29	ぬき	5	9尺5寸	大:8寸5分 小:5寸5分		
6	〇〇面?	大けた	3間	1尺2寸	○	30	ぬき	8	8尺5寸	大:8寸5分 小:5寸5分		
7	大けた	1	4間2尺	1尺2寸	○	31	組物大戸	8	6尺2寸	大:1尺2寸5分 小:8寸	○	
8	大内はり	2	4間2尺	大:2尺2寸 小:1尺2寸	△○	32	肘木 (要再考)	(読み取れず)	7尺5寸	大:5寸5分 小:4寸5分	—	
9	大内はり	6	3間	大:2尺2寸 小:1尺2寸	△○	33	まき戸	60	5尺2寸	大:6寸8分 小:4寸8分	△○	
10	大内はり	4	2間	大:2尺2寸 小:1尺2寸	△○	34	くもひじき	22	5尺	4寸5分 角	—	
11	柱ぬき	17 (手直し有り)	3間	大:1尺1寸 小:8寸	△×	35	通りひじき	50	3間	大:5寸5分 小:4寸5分	△×	
12	柱ぬき			(読み取れず)	—	36	大ひじき	22	6尺 (要再考)	1尺2寸 角	△○	
13	大かもし	2	3間2尺	大:1尺3寸 小:9寸	△×	37	たる木	170	1丈6尺	大:6寸5分 小:4寸5分	△○	
14	大鴨居	10	1丈1尺	大:1尺3寸 小:9寸	△×	38	角木	4	(記載なし)	〇合 (読み取れず)	○	
15	大鴨居	2	1丈1尺	大:1尺3寸 小:9寸	△×	39	大はり間	大こうりやう	2	5間2尺	(読み取れず)	○
16	大鴨居	4	2間	大:1尺3寸 小:9寸	△×	40	大はり間	大こうりやう	2	3間	(読み取れず)	○
17	敷居	3	(読み取れず)	大:1尺2寸 小:9寸	△×	41	大ゆき間	大ゆき間	3	4間2尺	大丸た	△○
18	敷居	10	1丈5尺	大:1尺2寸 小:9寸	△×	42	大ゆき間	大ゆき間	8	3間	大丸た	△○
19	敷居	4	2間	(読み取れず)	△×	43	内はり上	大ゆき間	1	4間2尺	丸た	△○
20	内しきい	2	(記載なし)	大:1尺2寸 小:9寸	△×	44	大はり間	こうりやう	8	4間2尺	(記載なし)	○
21	内はり	20	1丈	大:1尺4寸 小:9寸	○	45	大はり間	8	3間3尺	(記載なし)	△○	
22	たる木がけ	8	3間	大:1尺 小:7寸	△○	46	ねた	4	4間半	大丸た	△×	
23	たる木がけ	2	1丈5尺	大:1尺 小:7寸	△○	47	ねた	4	2間4尺	大丸た		
24	たる木がけ	4	(読み取れず)	大:1尺 小:7寸	△○	48	ねた	20	9尺5寸	大丸た		
						49	ひじき (要再考)	3	4間	大:6寸 小:4寸	—	
						50	ひじき (要再考)	6	(記載なし)	大:6寸 小:4寸	—	

◎: 条件なしで一致 ○: 条件付で一致 —: 考察不可能

△○: 推察 (照合結果に開きがある、条件を付ければ近似する)

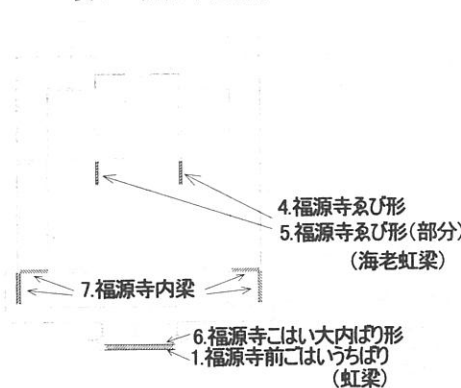
△×: 推察 (照合結果はかけ離れる)

建立後、須弥壇後方の後門外の空間が拡張された。そして、板張りだった脇障の内部化が進み、畳敷きとなった。また、前面の向拝虹梁が取り換えられたと推察される。それは、表2の関連史料を遺構と比較することで、次の図3のように位置付けられることから判明する。

・各絵様下図の部位について

図3に、各絵様下図の部位を示す。

表3-絵様下図部位



条件なしで一致するものは1つもなく、全体的に数量の開きがかかなり多くある事が分かった。当時の仕上がり代など見込み寸法をどの位とっていくかでその結果は変わってくるであろう。主要部材である四天柱・長押・台輪・大引・造作材・彫刻類は記されていない事から、全部材は注文していない事が分かる。手元にある部材は注文せずに用いるなど現在と同じやり繰りする光景が垣間見える。新築と増改築の違いは、柱や桁が決め手となる。注文柱数から新築であることは間違いなく、その柱・梁・桁数と桁全長は遺構と一致し規模が同格であることが分かった。柱・梁・桁数と桁全長が一致した事は、遺構がこの「覚」により成立していることに符合する。よって、元文期の遺構と判定することができる。

5 福源寺本堂の復元

以上の分析に基づき、文書当時の平面図を作成、遺構と合わせて3次元CADを利用して復元し、その変容の過程を明らかにする。その当初平面図と復元3次元画像を図4・5・6・7・8に示す。

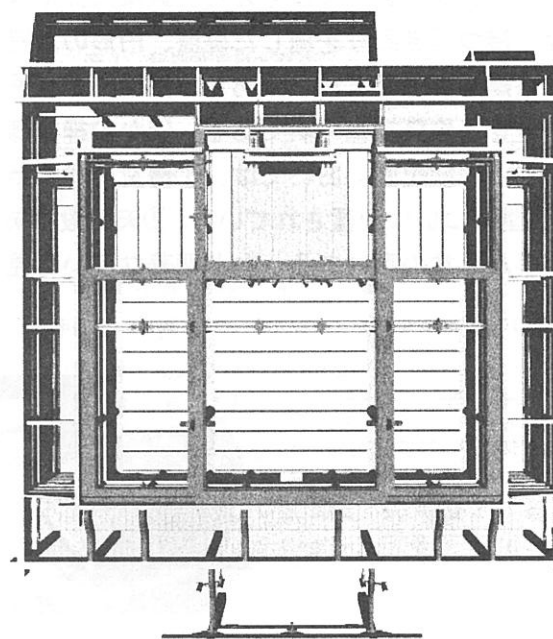


図5-現存遺構

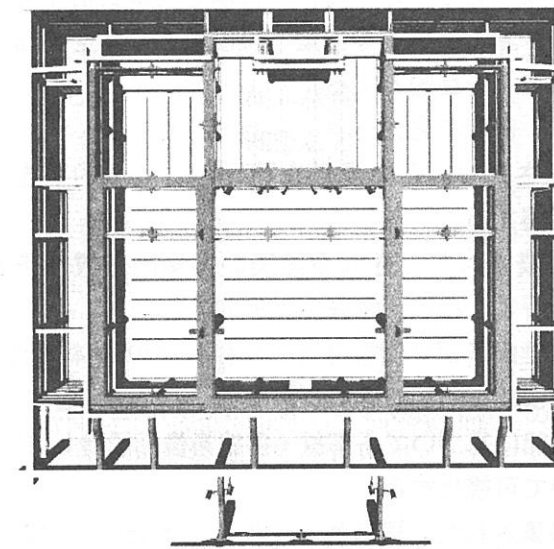


図6-当初復元

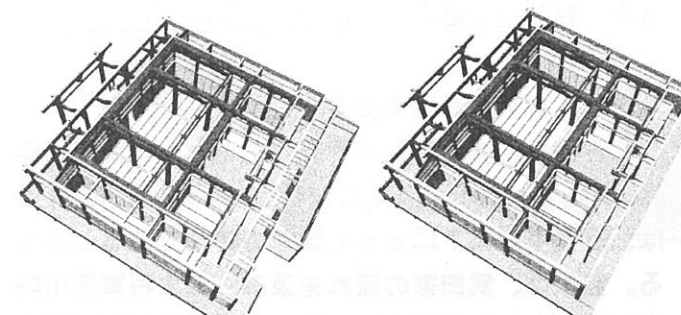


図7-現在遺構パース

図8-当初復元パース

一参考文献一

- 山梨県教育委員会編『山梨県の近世社寺建築』(1983)
- 加々美 友則『萱沼家文書に見る近世郡内大工に関する研究』(2000年度東京理科大学卒業論文)
- 櫻井 敏雄著『浄土真宗寺院の建築史的研究』(1997)